明治初期から昭和20年8月までの「家族」に
関する論文資料約1,200点を収録。

家族研究
論文資料集成

明治 大正 昭和前期篇　全27巻／別巻1

老川　寛 監修・解説

クレス出版

「家」と「家」との結婚式　明治40年頃。

刊行にあたって

広島国際学院大学教授
老川寛

この集成は、明治、大正、昭和前期（二十年八月まで）に公刊された雑誌の記事の中から、家族関連のものを広く選んで分類し発表順に配列したものである。

記事のリスト・アップにあたっては、後掲の諸文献に基づいているが、若干の雑誌（例えば社会事業、社会事業研究、統計集誌および家庭雑誌）については直接逐一参照した。結果的に雑誌の種類は、学術研究誌、各種機関の紀要類、専門雑誌、総合雑誌、一般誌、啓蒙雑誌と多くなっている。

したがって、復刻記事の内容は統計、報告、翻訳、紹介（海外）、論説、調査結果、研究論文など多方面に及んでいる。量的にみると、短いのは一頁からあり、長いものでは数百頁にもなる。最も多い学術論文には、当初から重厚な連続発表で後日、単行本として刊行されたものも含まれている。

本集成刊行の趣旨を特記してみれば、以下のようになるであろう。

1. 各時代あるいは複数時代に生きた先人の家族にかかわる論述と研究の成果を改めて保存し活用の便宜に資すること。
2. 利用者の興味と関心の多様性に応えることを期している。
3. 家族研究の系統的かつ組織的な把握の一助になることを念願している。
4. 収録論文と資料を基盤にさらなる展開と飛躍に役立つならばなによりのことと考えている。
5. そして、家族研究の史的俯瞰になにがしかの寄与ともなれば望外の意義となるであろう。

なお、家族法と法社会学における家族研究の論稿については、別に企画が予定されている。

参照文献
天野敬太郎編『法政経済社会　論文総覧』昭和二年、『法政経済社会　論文総覧追篇』昭和三年、刀江書院。
小山隆「日本家族研究文献」『季刊社会学』三号と四号（昭和二十四年と二十五年、同文館）。
唄孝一『家族法参考文献目録』昭和二十八年、最高裁判所事務総局。
川合隆男編『近代日本社会学関係雑誌記事目録』平成九年、龍渓書舎。

●全巻構成

第1巻　家族・家族制度論(1)
第2巻　家族・家族制度論(2)
第3巻　家族・家族制度論(3)
第4巻　家族・家族制度史(1)
第5巻　家族・家族制度史(2)
第6巻　家族構造
第7巻　大家族
第8巻　戸籍・人口(統計)(1)
第9巻　戸籍・人口(統計)(2)
第10巻　戸籍・人口(統計)(3)
第11巻　戸籍・人口(統計)(4)
第12巻　家族の機能(1)
第13巻　家族の機能(2)
第14巻　家族の伝統と変化
第15巻　農・山・漁村家族(1)
第16巻　農・山・漁村家族(2)、都市家族
第17巻　婚姻(1)
第18巻　婚姻(2)
第19巻　婚姻(3)
第20巻　婚姻(4)
第21巻　婚姻(5)
第22巻　婚姻(6)
第23巻　離婚、相続
第24巻　隠居、分家、親子
第25巻　親族・同族・氏族
第26巻　家族の問題(1)
第27巻　家族の問題(2)
別巻　総目次、執筆者別索引、解説

推薦の言葉

前日本家族社会学会会長
早稲田大学教授
正岡寛司

家族や家族制度、および家族思想に関する正鵠を得た歴史的研究が看過され、家族現象の社会時評や文明批評が横行している昨今である。こうした家族研究の現状を打開するためにあるべきひとつの方途を『家族研究論文資料集成　明治　大正　昭和前期篇』の刊行という形で問題提起したのが、斯界の権威・老川寛明治学院大学名誉教授ではなかったか。

老川さんが、明治、大正、昭和戦前期の長い期間にわたる家族、戸籍、人口、婚姻、離婚、相続、隠居、分家、親族など広範囲にわたる膨大な数量の文献資料を精選し、全二七巻別巻一に編むという大事業に取り組んだ真意は、文献データベースを構築するという域をはるかに超えたところにあり、むしろ家族研究の在り方に一大試金石を投じようとする老川さん自身の情熱と野心にあると、私には感じられる。老川さんの心意気は、必ず若き学徒によって真摯に受け止められ、やがて『家族研究論文資料集成』をデータソースとした新しい家族研究のジャンルが開拓されると確信する。

かつて、老川さんが故山室周平先生とのあいだで戦わしたいわゆる「核家族論争」は、すがすがしい論争であった。しかしその後、家族をめぐる知的な疑問ならびに実践的な問題は数限りなく噴出したにもかかわらず、創造的な論争が成り立たず、ひたすら大量の情報が生産され、消費されてきた昨今の状況を疎ましく思うばかりである。この資料集成がわが国家族の歴史的視点に根ざした新しい論争の火種になることを切望する。

本企画を実現されたクレス出版の編集方針に心からの敬意を表したいと思う。最後にひとつだけ要望させてもらうとすれば、本編集企画完成の暁には、ぜひとも『家族研究論文資料集成』のCD版を刊行してほしいと願うのは、私だけではないであろう。

(財)兵庫県長寿社会研究機構・家庭問題研究所所長
甲南大学文学部教授
野々山久也

家族にはいくつかの側面がある。複数の個人からなる集団という点を重視すれば、集団としての家族の側面が浮上してくる。今日、少子化問題の解決のための有力要因の一つが夫の家事育児への参加であり、家族関係における夫婦の平等化であると言われ、期待される家族変動の方向が話題にされるとき、集団としての家族のあり方が注目されている。

一方、家族には制度という側面がある。集団としての家族のあり方は、制度としての家族のあり方と無関係ではない。これまで日本の家族は、どのような制度を維持してきたのか。それを明らかにするには過去における日本の家族や婚姻に関連する諸法についての知識を増やすだけでは覚束ない。なぜなら制度の維持は、集団としての家族による生活上での実践活動をとおしてのみ可能であるからだ。結局、今日においては蓄積されている既存の家族研究の資料あるいは文献をひも解く以外に方法はない。

とはいえ研究者にとって、さまざまな研究雑誌や紀要などに収録されている貴重な文献を入手することは容易ではない。幸いにして家族や婚姻関連の研究文献の復刻には定評のあるクレス出版が、このたび老川寛先生の監修・解説のもとに『家族研究論文資料集成』を刊行することになった。誠に心づよく、喜ばしいかぎりである。

老川先生は学会において知る人とぞ知る「家族研究史」通として、かねてより著名である。先生の蓄積された洞察力が存分に発揮された本集成のご購読をぜひお勧めしたい。

収録論文資料目録の一部

家族・家族制度論(1)

〔明治42年〕
家族ノ経済観　河田　嗣郎
女人ノ地位　岡村　司
家に就て　石山　弥平
日本ノ氏族制度　河田　嗣郎
〔明治43年〕
家族制度維持ノ必要ト其方法　河田　嗣郎
家産の制度と農民　沢田竹治郎
家族の崩壊が社会団結に及ぼす結果　高田　保馬
〔明治44年〕
個人主義と家族主義　塚原　政次
理想的家庭　岸本能武太
家族制度ノ崩壊カ社会生活ニ及ホス影響　河田　嗣郎
上下貴賤の序、岸本氏の理想的家庭論　西　晋一郎
個人主義か家族主義か　中島　徳蔵
家族主義と個人主義　井上哲次郎
〔明治45年〕
統計的細民調査論　田中　太郎
〔大正2年〕
我戸主制度ノ得失ヲ論ス　本庄栄治郎
〔大正3年〕
我邦の家庭　西　晋一郎
「家」といふ観念　塚原　政次
家庭制度論　新見　吉治
〔大正4年〕
家庭と人物の出現　中島　力造
〔大正5年〕
都市生活と親隣感情　大山　郁夫
〔大正6年〕
母系主義と台湾生蕃　岡松参太郎
家制と救済　建部　遜吾

家族・家族制度史(2)

〔昭和9年〕
家父長権の歴史について　玉城　肇
日本中世の家族制度　禰津　正志
古代日本の氏族制社会について　内田　繁隆
日本上代に於ける女系と女権　野村　重臣
経済史的に見た日本中世の家族制度　禰津　正志
〔昭和10年〕
藤原時代縉紳家の家庭　江馬　務
生児遺棄の史的研究　竹中　多計
徳川幕末期に於ける大名の階級的内容　横江　勝美
原始家族に就いて　河村　只雄
〔昭和11年〕
台湾に於ける家族制度の一考察　原　忠明
五人組制度の復興　田村　浩
〔昭和12年〕
原史時代の思考と女性　田口　武男
日本家族の一典型　玉城　肇
〔昭和13年〕
家領の伝領に就いて
近世に於ける家業意識の考察
〔昭和14年〕
近世の武士の家訓と主従関係意識　中村　直勝
日本封建社会に於ける女性観　桜井庄太郎
〔昭和15年〕
支那の宗法制度　桜井庄太郎
生活安定保障策としての班田制度　桜井庄太郎
明治初年千葉県の育児法　岡田　巧
明治初年木更津県の育児法　太田　鼎三
〔昭和16年〕
わが古代家族生活の一形態　高橋　東山
江戸時代の商人意識と家訓及店則　高橋　東山
和歌森太郎
宮本　又次

戸籍・人口（統計）(3)

〔昭和2年〕
家族統計概論　財部　静治
徳川時代の出生率附死亡率　増谷達之輔
宗門人別改制度の沿革　菊田　太郎
我国に於ける人口問題　楠原祖一郎
都市に於ける乳児死亡に関する一研究　楠原祖一郎
人口論上の階級別産児問題　増田　抱村
統計と云ふ言葉　下出　隼吉
〔昭和3年〕
自然の人口と人工の人口　戸田　貞三
私生子に関する一研究　楠原祖一郎
我が国の水上生活者問題に関する私見　鈴木　英男
我内地に於ける自殺の一般的永続傾向に関する一研究　井上　謙二
産児制限と人口問題　増田　抱村
私生子の統計的研究　関森　健次
生活程度と人口との関係についての一考察　玉城　肇
社会事業としての産児制限論の矛盾　磯村　英一
〔昭和4年〕
時季に依り観たる浮浪者の生活種々相　杉田安太郎
宗門人別帳と戸籍の話　秋山　遮莫
出生率減少の事実　林　恵海
人口動態平行律　林　恵海
農民の死亡率と農村保健問題　内館　泰三
東京に於ける浮浪者に就いて　草間八十雄
浅草公園に於ける浮浪者の調査報告
中央社会事業協会研究生協同調査
宗門人別改めの発達　長沼　賢海
〔昭和5年〕
都鄙別に見たる出生、死亡率　関森　健次
人口移動（移民）の季節的変動　池田　実一

■第6巻　家族構造　昭和12年　戸田貞三著

現代我國民の形造つて居る家族の形態に就いて

家族をその構成形式上より觀てこれを各種の型に類別せんとする場合には種々の分類方法が用ひられ得るのであるが、玆には我内地人の形造つて居る家族を量的に區別して、如何なる型に屬するものが如何程あるかを考察することとする。從來行はれた多くの家族型の分類は夫婦關係の形式に基準を置いたもの、親子關係の辿り方に基準を置いたもの、家族の統制形式に基準を置いたもの及び家族的傳統の持續性に基準を置いたもの等種々樣々のものがあるが、此等の分類は何れも家族には甲種のものと乙種のものとが區別せられ得ると云ふに止まり、單に定性的に甲種のものは如何なる性質のものであり、乙種のものは如何なる性質のものであるかを説明するに止まつて居る。家族の構成形式を考察する場合には各家族の性質の差に從つて之を定性的に類別することも必要であるが、併し單に定性的分類丈に止まる場合には果して如何なる構成形式のものが事實上最も行はれ易い家族であるか、又社會的環境の異なるに從つて如何なる型のものがあらはれ易く、如何なるものが減少し易くなつて居るかを明にし難い。例へば家族の統一化

■第10巻　戸籍・人口（統計）　昭和8年　岡崎文規著

社會生物學的問題の家族統計的研究に就て

岡崎文規

一

新聞紙の報道によれば、七月十二日に開催せられたる第二十六回中央統計委員會總會に於て、昭和十年國勢調査計畫準備に關する諮問案中、從來の氏名、體性、年齢、配偶關係等の調査事項以外に、出産の調査の一項を加へ、婚姻の年月日及び出生子女數の調査が問題になつたと言ふ事である。

國勢調査の一調査事項として、かゝる出産力に關する調査は、從來、大體に於て孰れの國に於ても比較的等閑に附せられ、只だ例外としてフランスのみが屢々かゝる調査を實施したに過ぎない。また一九一一年の英國の國勢調査に於ても、同樣の調査が實施せられた事も特筆するに値あるものである。その他獨逸では、Berlin, Frankfurt a. m., Bremen 等の諸都市に於て、かゝる調査が實施せられた事があるが、その結果は滿足なものではなかつた。要するに出産力に關する調査は、國勢調査に於て、從來、輕視される傾向があつたのであるが、歐洲大戰後、新人口政策を樹立するに當つて、出産力を測定する事は大なる重要性を加へる事となつたのである。歐洲大戰の結果、歐洲諸國特に獨逸に於ても二百萬の壯丁を失ひ、また三百萬乃至三百五十萬の出産不足を出だしたの

家族研究論文資料集成　明治 大正 昭和前期篇

■**第一回配本**（二〇〇〇年五月刊）
第1巻～第5巻　全5巻
家族・家族制度論　全3巻
家族・家族制度史　全2巻
揃定価八六、〇〇〇円（税別）
ISBN4-87733-092-5 C3336

■**第二回配本**（二〇〇〇年八月刊）
第6巻～第11巻　全6巻
家族構造、大家族　全2巻
戸籍・人口（統計）　全4巻
揃定価一一六、〇〇〇円（税別）
ISBN4-87733-093-3 C3336

■**第三回配本**（二〇〇一年一月刊）
第12巻～第16巻　全5巻
家族の機能、家族の伝統と変化　全3巻
農・山・漁村家族、都市家族　全2巻
揃定価一一三、〇〇〇円（税別）
ISBN4-87733-094-1 C3336

■**第四回配本**（二〇〇一年四月刊）
第17巻～第22巻　全6巻
婚姻　全6巻
揃定価一二〇、〇〇〇円（税別）
ISBN4-87733-095-X C3336

■**第五回配本**（二〇〇一年八月刊）
第23巻～第27巻　全5巻
離婚、相続、隠居、分家、親子
親族・同族・氏族　全3巻
家族の問題　全2巻
揃定価八〇、〇〇〇円（税別）
ISBN4-87733-096-8 C3336

■**第六回配本**（二〇〇一年十二月刊）
別巻　総目次、執筆者別索引、解説
定価五、〇〇〇円（税別）
ISBN4-87733-097-6 C3336

■**全27巻／別巻1**
揃定価五二〇、〇〇〇円（税別）
A5判、上製函入、クロス装
本文クリーム中性紙使用

●クレス出版好評既刊書●

家族論の宝庫、精選された古典

「家族・婚姻」研究文献選集

■**戦前篇〈新装版〉全15巻／別巻1**　湯沢雍彦監修

明治から昭和二十年（終戦）以前に出版された家族に関する文献を学際的に選び、解題を付けて復刻。

揃定価一五四、〇〇〇円（分売不可）

全巻構成

1. 増補 族制進化論　有賀 長雄
2. 隠居論　穂積 陳重
3. 子供本位の家庭　安部 磯雄
4. 離婚制度の研究　穂積 重遠
5. 家族制度と婦人問題　河田 嗣郎
6. 日本家族制度史研究　砂川 寛栄
7. 家族と婚姻　戸田 貞三
8. 日本家族制度批判　玉城 肇
9. 家族主義の教育　新見 吉治
10. 日本農村社会学原理　鈴木栄太郎
11. 日本民俗学上より見たる 我国家族制度の研究　橋浦 泰雄
12. 結婚と人口　岡崎 文規
13. 白川村の大家族　江馬三枝子
14. 日本家族制度と小作制度　有賀喜左衛門
15. 家と家族制度　戸田 貞三
別. 人事慣例全集　自治館

岡崎文規著作選集　人口と家族

全6巻／清水浩昭監修・解説
人口学の第一人者岡崎文規の主要著書・論文のうち、「人口と家族」の視点から編集。結婚、離婚、出産、死亡全般、自殺、他殺など人口動態の幅広い資料。
揃定価八五、〇〇〇円

戦前期 国勢調査報告集

全19巻／湯沢雍彦監修　財団法人日本統計協会編集協力
大正9年を第一回として、五年毎に調査されている「国勢調査」の戦前分を復刻。日本の家族、地域社会、全国のすぐれた断面図を提供する重要な資料。
揃定価三七六、〇〇〇円

社会福祉統計年報

全3巻／厚生省大臣官房統計調査部編　上掛利博解説
昭和26年度より同34年度まで各都道府県から提出された統計報告をまとめて解説を付けた公刊資料。解説の最後には、英文概要も付けられている。
揃定価九〇、〇〇〇円

文献選集 教育と保護の心理学

全四期48巻／大泉溥監修・解題
近代日本の教育や社会的保護（児童福祉・社会福祉）にかかわる諸労作を心理学史の立場から精選編集。明治から昭和戦後初期の単行本と雑誌・紀要を収録。
揃定価九九六、〇〇〇円

「子どもと家庭」文献叢書

全12巻／石川松太郎監修　山本敏子・藤枝充子編集協力
明治初年より昭和期の第二次世界大戦終了時までに家庭教育について論述した文献を、子どもと家庭（とくに両親）との人間的な関わりに視点をおき編集。
揃定価一三二、〇〇〇円

戦後家庭教育文献叢書

全10巻／石川松太郎・山本敏子監修・解説
人間形成の基礎といわれる「家庭教育」を対象とした著書・論文を、戦後の昭和二十年代後半より同四十年代後半にかけて出版された十七点を選んで復刻。
揃定価九四、〇〇〇円

株式会社クレス出版　〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町14-5　メローナ日本橋
☎03(3808)1821　FAX03(3808)1822　http://www.kress-jp-com/